

初中級日本語学習者のプレゼンテーションに現れる

語彙処理能力について

朱炫姝（目白大学）

要 旨

本稿は、日本在住の初級中日本語学習者を対象とし、プレゼンテーションに現れる語彙処理能力について、使用された語彙の難易度・多様性・誤用の面から考察を行ったものである。調査は、日本語教育機関で2年以上日本語を学習している59名を対象とし、プレゼンテーション活動を通じ、発話を文字化した上、「リーディング チュウ太」を利用し、語彙処理能力を分析した。

その結果、語彙の難易度が日本語能力試験 N4・N5 レベルに留まっている点、多様性は母語話者の話し言葉における多様性基準をはるかに下回っている点、助詞の非用や用言活用の誤用が観察された。今回の調査を通じ、上級レベルを目指す初中級学習者に対する語彙処理能力を向上させるため、語彙処理能力を高める要素を明確にすることができた。

キーワード：日本語学習者、プレゼンテーション活動、語彙処理能力、語彙の難易度、語彙の多様性

1. はじめに

本稿の目的は、日本語学習者の語彙処理能力に注目し、プレゼンテーション活動を遂行するにあたり、どの程度の語彙力を有するかという問いを解明することである。日本語教育におけるプレゼンテーション活動は、「JF 日本語教育スタンダード」の中で、「産出」に該当し、「情報交換する」活動である。プレゼンテーション能力を養うためには、次の「言語構造的な能力」、「語用能力」、「機能的な能力」に分けて考えることができる（国際交流基金 2017）。「言語構造的な能力」では、使用できる言語の範囲や、使用語彙領域、語彙の使いこなし、文法的な正確さ、語素の把握がある。語用能力では、発言権や柔軟性、話題の展開等があり、機能的な能力では話し言葉の流暢さや叙述の正確さ等がある。本稿では、その中で、言語構造的な能力に属する語彙処理能力に注目し、学習者がどのような語彙を使いこなしているかを考察した。

語彙処理能力とは、学習者の日本語熟達度を把握する手段の一つである。そのため、語彙力を的確に測定し、評価することは日本語能力を向上させるために重要な課題であると言える。一方、これまで語彙学習に関する研究で注目されてきたのは、語彙知識を習得し、その意味を認知し、正用する点である。だが、語彙処理能力の分析では、使用できる語彙の範囲と語彙の使いこなしをより広い談話という範囲で網羅的に捉えている点が、従来の研究との相違点である。

したがって、本稿ではプレゼンテーション活動という産出活動を一つの例として挙げ、学習者の語彙処理能力を分析し、その特徴を調べる。

2. 調査概要および分析方法

2.1 調査概要

本調査は、東京都所在の A 大学で 2019 年 1 月に実施したプレゼンテーション活動調査である。調査対象としたのは、日本語や日本の社会・経済・歴史・文化等を学修する学部研究生⁽¹⁾である。日本在住歴は平均 2.4 年であり、国籍はベトナム 24 名、ネパール 13 名、中国 10 名、その他（ミャンマー、モンゴル等）12 名で計 59 名である。男女別人数は、男性が 31 名、女性が 28 名である。

対象者の日本語能力について、プレイスメントテスト⁽²⁾の成績が 25～35 点（60 点満点）であり、言語知識のレベルから言うと、日本語能力試験 N3 レベルであると言える。また、対象者は日本語教育機関において 2 年以上日本語を学習しても中級レベル以上に至らず、初級レベルに留まっている点が指摘できる。

プレゼンテーション活動の概要について、テーマは「自国の料理を紹介する」とし、1 名約 3 分程度プレゼンテーションをしてもらい、その後質疑応答の時間を設けた。プレゼンテーション活動は「JF 日本語教育スタンダード」の活動 Can-do で考えると、「クラスメートを聞き手とし、自国のお料理について発表内容を事前に下書きし、スピーチをすることができる」活動となる。

プレゼンテーション活動の準備として、事前に「お料理の名前」「料理の写真」「材料」「作り方」「味」「いつ食べる料理であるか」等について、「図 1」のようにタスクシートに作成してもらった。その後、筆者が内容の面等、最小限に添削を行った。その後、添削を熟知し、準備する時間を与え、お料理の写真を提出してもらい、プレゼンテーションの際に写真を提示しながら活動ができるように工夫した。プレゼンテーション活動のイメージを「図 2」に表す。

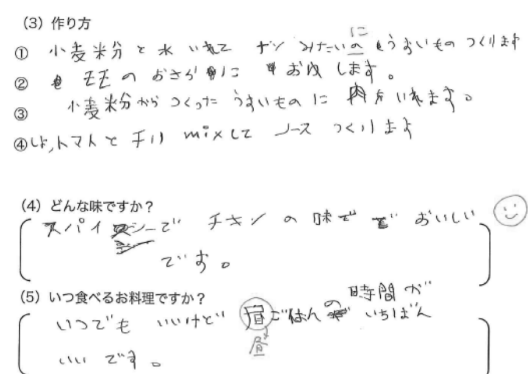


図 1 タスクシートの記入例

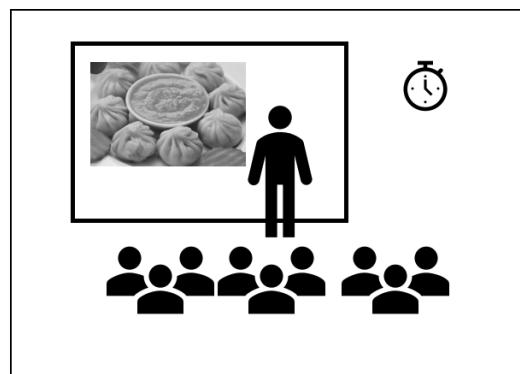


図 2 プレゼンテーション活動のイメージ

2.2 分析方法および語彙処理能力測定の基準

本稿では、語彙処理能力の測定方法として、「リーディング チュウ太⁽³⁾」を使用した。録音・録画したプレゼンテーション活動のデータを見ながら、すべて文字化作業を行い、発表者別語彙の分析に入った。その分析例を次の「図 3」に表す。

リーディング チュウ太

入力された文章

みなさん、おはようございます。
 今日は私の国の人気がある料理について発表します。
 私の国で人気があるのはいっぱいありますが、モモという食べ物は大人気です。
 モモは作るために小麦粉、肉、トマト、チリ、お水、醤油、油で作られます。
 作る方なんですけど小麦に水入れてそのあと混ぜてナンみたいの小麦の生地ほしいやつを作ってそこに肉
 お肉を入れてからでラップしてから作ります。
 であと10分15分ぐらい15分ぐらいでできあがります。
 味なんですけどこれはスパイシーでチキンの味がいちばん美味しいです。
 これはいつでも食べ食べられる料理なんですけど、一番いいは昼ごはんのときがみんな食べています。
 みなさん、もし食べたいならネパール料理さんに行って食べてください。

単語レベル: ★★ やさしい

| 総数 | 語彙総数 | 級外 | N1 | N2N3 | N4 | N5 | その他 |
|--------|--------|-------|------|-------|------|-------|-------|
| 186 | 164 | 15 | 1 | 12 | 9 | 127 | 22 |
| 113.4% | 100.0% | 9.1% | 0.6% | 7.3% | 5.5% | 77.4% | 13.4% |
| (92) | (88) | (12) | (1) | (10) | (8) | (57) | (4) |
| 104.5% | 100.0% | 13.6% | 1.1% | 11.4% | 9.1% | 64.8% | 4.5% |

図 3 リーディング チュウ太による分析例⁽⁴⁾

また、語彙処理能力を測るため、使用語彙の難易度、語彙の多様性、語彙の誤用という3つの基準を手がかりとして設定し、分析を行った。まず、使用語彙の難易度であるが、各レベルの語彙をどの程度使用できるかを把握することができる。語彙の認知だけではなく、使いこなせているかという語彙運用能力が判定できると考える。分析方法は、リーディング チュウ太で分析した結果をもとに、使用された当該語彙が日本語能力試験のどのレベルに該当するかを調べる。

次に、語彙の多様性を測るため、TTR(Type-Token Ratio)を採用する。TTRはこれまで主に英作文分析に使用されてきているが、語彙の総語数と異なる語数の割合を算出する方法である(「図4」を参照)。つまり、数値が高ければ高いほど、様々な語彙が使用されていることになる。

$$TTR = \frac{\text{異なり語数}}{\text{総語数}} \times 100$$

図 4 語彙の多様性を測る TTR

最後に、語彙処理能力を測る方法として、語彙の誤用を取り上げる。誤用の領域は、単に語彙の意味や文法を正確に習得していないという認知の問題から、語彙の使い分け、類義語との関連性、使う場面への理解不足のため起こる運用の問題まで様々である。本稿では筆者が誤用であると思うところを日本語母語話者に確認してもらう方法で進めた。プレ

ゼンテーション活動であるため、口語的な使い方として違和感を感じない場合には誤用としなかった。

3. プレゼンテーション活動における語彙処理能力について

3.1. 使用語彙の難易度

学習者がプレゼンテーション活動で使用した語彙で、使用頻度が最も高い語彙は「食べる」「作る」「美味しい」「料理」「国」である。プレゼンテーションのタスクが「自国の料理紹介」という限定されたテーマであったためであるが、出現した語彙を日本語能力試験の出題基準で分析したのが「図 5」である。日本語能力試験 N5 レベルの語彙では「国」や「料理」「作る」等が該当し、N4 レベルの語彙は、「いっぱい」「味」といった語である。N2・N3 レベルでは「人気」「小麦粉」「混ぜる」「炒める」が使用され、N1 レベルである「やつ」という語彙が出現した。

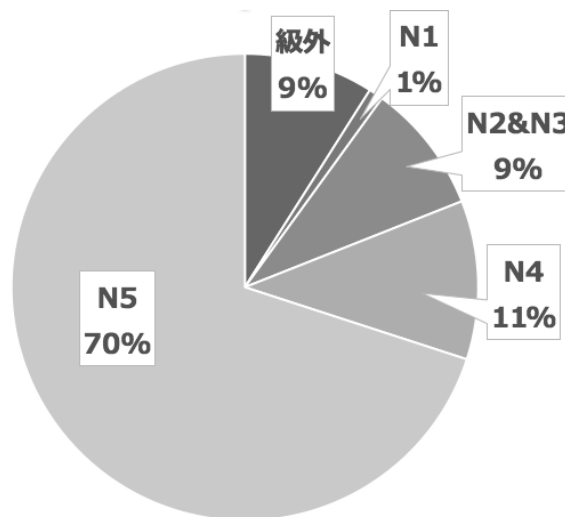


図 5 日本語能力試験の各レベルによる使用語彙の難易度

「図 5」でわかるように、学習者による使用語彙の約 81%が日本語能力試験 N4・N5 レベルであり、使用語彙のほとんどが初級レベルの語彙に偏っている傾向が確認できた。このような結果について学習を重ねてきた語彙の使用頻度が高いのが自然であると思われる。一方、今後語彙の難易度を上げていくために、中上級レベルの語彙習得が課題となるが、単なる難易度を上げるだけではなく、語彙の多様性の拡張を意識しながら難易度の向上も図るべきであると考えられる。

3.2. 語彙の多様性

語彙の多様性は、算出された発話の質を分析する一つの基準であり、どれくらい多様な語彙を使用しているかを分析するものである。語彙の多様性分析は、先述した通り、TTR を使い、使用した総語数と異なり語数の割合で計算した。母語話者の基準とした多様性の基準は、杉森（2010）による話し言葉の基準を参照した。集計したすべてのデータを対象としたが、使用された総語数の述べ語数は約 6,500 語であり、異なる語数は約 1,600 語の

語彙が抽出できた⁽⁵⁾。TTR の計算によると、初中級学習者によるプレゼンテーション活動においては「24.62」となる。田島・深田・佐藤（2008:54）によると、日本語母語話者の作文データによる TTR の平均が「49.0」であったが、本調査の結果と比較すると、初中級学習者による語彙の多様性が極めて低いことがわかる。

語彙の多様性は、使用できる語彙の豊かさを表す。つまり、プレゼンテーション活動で使用した語彙が豊富であればあるほど、同じ語彙の使用を回避し、他の表現に変えられる力があり、より多様な語彙を算出すると考えられる。

また、使用語彙における内容語の割合について述べると、名詞が約 40%、動詞が約 10%、形容詞が約 4%、副詞が約 6%であった。一般的に書き言葉では内容語が 40%以上占めるのに対し、話し言葉では 40%以下を占め、内容語の割合が減ると言われる。だが、今回の調査で、初中級日本語学習者によるプレゼンテーション活動の語彙分析では、内容語が約 6割も占めており、母語話者による発話とは異なる傾向が把握できた。

3.3. 語彙の誤用

誤用の面においては、主に発音と文法的な誤用が顕著であった。発音の誤用例として、次のような例（1）が挙げられる⁽⁶⁾。

- (1) a. ミツ[水] b. トンガラシ[唐辛子] c. ゼリョ[材料]⁽⁷⁾
- (2) 私が[が]今日発表したいミャンマーの料理はプチャンです。
- (3) ボールで[に]小麦粉を入れます。
- (4) 作る方[作り方・作る方法]について説明します。

また、語彙の運用の面において、助詞の誤用が目立つが、以下の例（2）のように助詞の非用により、違和感を感じる例があった。書き言葉に比べて話し言葉では、助詞の非用が容認されることが多いが、省略してはならない助詞をどのように習得するかが問題となる。

さらに、文法的な誤用について、例（3）（4）が挙げられるが、例（3）は助詞の使い方における誤用例である。また、例（4）のように、活用の誤用とも考えられるが語彙の誤用があった。

4. おわりに

本稿では、初中級日本語学習者を対象とし、プレゼンテーションという学習項目における語彙処理能力について考察した。結論として得られたことについて述べる。まず使用語彙の難易度において、使用語彙の約 8割相当が初級レベルの語彙である点が挙げられる。また、語彙の多様性においては、先行研究で指摘された日本語母語話者の話し言葉における多様性の基準に比べると約半数にしか至らないことがわかった。そして、語彙の誤用の面については、プレゼンテーションであるにもかかわらず、違和感を感じる助詞の非用が目立つ点が指摘できる。

このような点を踏まえ、初中級学習者がプレゼンテーション能力を養うためには、中上級レベルの語彙を定着させていく必要性が出てくる。特に、語彙の運用についても、同じ

語彙の繰り返しが多いことから使用される語彙の異なり語数が少ないことであるため、類似表現や言い換え表現を学習し、より幅広い範囲に使えるような語彙処理能力を養う必要も提言できる。

本稿では、語彙処理能力の中で、語彙の難易度と多様性を数値化することで、学習者の語彙力の測定を試みた。使用できる語彙の難易度を向上し、語彙の多様性を持つようにし、誤用を少なくすることで、学習者の語彙処理能力のプログレスにつながると考える。今後の課題は日本語母語話者もしくは上級日本語学習者グループ等の比較群の調査を加え、比較分析することで、初中級日本語学習者が目指す語彙処理能力の在り方をよりの確に設定できると思う。

注

- (1) A 大学の学部研究生の学習期間は1年コースであり、修了後日本の大学や短期大学、専門学校に進学を希望している学習者が多い。また、ほとんどの学習者が入学前に日本語学校や専門学校で日本語を学習した経験がある。
- (2) プレイスメント・テストは、入学してすぐに実施した筆記試験で、試験の内容は主に日本語能力試験の言語知識（文字・語彙・文法）を問う問題である。問題の大まかな構成は、N4・N5レベルが50%、N3レベルが20%、N1・N2レベルが10%である。
- (3) 「リーディング チュウ太」は日本語学習のために作られたウェブシステムであるが、「語彙チェッカー」の機能を使うと、日本語能力試験を基準にして語彙の難易度を判定することができる。
- (4) 図でわかるように「リーディング チュウ太」は、「日本語能力出題基準（旧試験）」を基準にしているため、N2・N3が同じカテゴリーに分類される。
- (5) 使用された語彙の中で、言い淀みや感嘆詞等は対象外とし、多様性分析では除外した。
- (6) このような類の誤用については、ただ呂律が回らなくなっただけであるか認知レベルでの誤用であるかという要因を明らかにすることができないが、紙面による語彙テスト等を加えることが明確にできると思う。これについては今後の課題としたい。
- (7) 例の表記で、下線を引いたところが誤用であり、[]の中に正用の例を記入した。

参考文献

- 小笠原典子(2018)「日本語能力の伸びと停滞—本学留学生の事例をもとに—」『十文字学園女子大学紀要』48-2 十文字学園女子大学 111-124
- 木下謙朗・荒瀬雅子(2017)「初級日本語学習者における産出物にみられる特徴—語彙使用の広がり」と誤用分析—」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』龍谷大学グローバル教育推進センター 43-54
- 国際交流基金(2017)『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』国際交流基金
- 後藤倫子・木戸恵子・中村祐理子(2017)「予備教育における日本留学試験「総合科目」対策クラスの語彙指導」『目白大学高等教育研究』目白大学教育研究所 37-44
- 杉森直樹(2010)「語彙力の測定・評価」石川祥一・西田正・斉田智里 編『テストと評価

4 技能の測定から大学入試まで』大修館書店 237-252

田島ますみ・深田淳・佐藤尚子(2008)「語彙多様性を表す指標の妥当性に関する研究—日本人大学生の書き言葉コーパスの場合—」『中央学院大学社会システム研究所紀要』9-1 中央学院大学社会システム研究所 51-62

山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子(2012)「中級停滞者の縦断的発話の分析—動詞語彙・単文・複文に着目して—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』横浜国立大学留学生センター 115-136

日本語読解学習支援システム「リーディング チュウ太」

<<http://language.tiu.ac.jp>>, 2020年1月5日参照

(ジュ・ヒョンジュ、目白大学外国語学部講師、murasakiju@gmail.com)